

きゅうり

1 予報（9月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
べと病	－	やや多	(1) 8月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年よりやや高かった。(+) (2) 9月の気温及び降水量ともにほぼ平年並の予報であり、特に発生を助長する条件ではない。(±)
うどんこ病	－	やや少	(1) 8月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年より低かった。(－) (2) 9月の気温及び降水量ともにほぼ平年並の予報であり、特に発生を助長する条件ではない。(±)
褐斑病	－	多	(1) 8月下旬の巡回調査では、発生圃場率、程度とも平年より高かった。(+) (2) 9月の気温及び降水量ともにほぼ平年並の予報であり、特に発生を助長する条件ではない。(±)
炭疽病	－	多	(1) 8月下旬の巡回調査では、発生圃場率、程度とも平年より高かった。(+) (2) 9月の気温及び降水量ともにほぼ平年並の予報であり、特に発生を助長する条件ではない。(±)
黒星病	－	やや少	(1) 8月下旬の巡回調査では、発生はみられなかった。(－) (2) 9月の気温及び降水量ともにほぼ平年並の予報であり、特に発生を助長する条件ではない。(±)
斑点細菌病	－	やや多	(1) 8月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年より高かった。(+) (2) 9月の気温及び降水量ともにほぼ平年並の予報であり、特に発生を助長する条件ではない。(±)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－)：重要な少発要因

2 防除のポイント

○褐斑病および炭疽病が多発しているので、発病葉は積極的に摘葉し、その後直ちに効果の高い薬剤を散布すること。

【共通事項】

- (1) 病害は降雨が続くと発生が増加するので、降雨前後の防除に努め、発生状況や天候に応じて薬剤を選択する。
- (2) 発病葉は随時摘み取り、圃場外に持ち出す。特に、アーチ上部の発病葉は下位葉への伝染源となるので、優先的に摘み取る。
- (3) 薬剤散布は、株全体の葉の表裏にかかるよう、アーチの両側から十分量をムラなく散布する。
- (4) 草勢が低下している圃場では、追肥・整枝・摘葉などの適切な管理により、草勢の回復に努める。過繁茂は、薬剤の到達を妨げるだけでなく、病巣にもなるので注意する。

【褐斑病・炭疽病】

- (1) 炭疽病は葉や茎、果実にも発病するので、発生がひどい株は抜き取り、圃場外へ持ち出し処分する。
- (2) 両病害とも発生を確認してからでは防除が難しく、特に褐斑病は発病後急激に蔓延するので、発生がみられた場合には、発病葉を摘葉後、直ちにアミスターオプティフロアブル等のQ o I 剤や、ゲッター水和剤を散布する。
- (3) Q o I 剤は耐性菌の発生リスクが高いので年2回以内の使用とし、連用しない。



図1 褐斑病の病斑（葉）



図2 炭疽病の病斑（左：葉、右：果実）

### 【べと病】

(1) 発生が見られる場合、フェスティバルC水和剤、ブリザード水和剤等の効果の高い薬剤で防除する。

### 【うどんこ病】

(1) 急激な増加が見られる場合、本病に効果の高いDMI剤（トリフミン水和剤、ラリー水和剤等）とカリグリーン、ジーファイン水和剤等を交互に散布する。

(2) うどんこ病耐病性品種であっても草勢が衰えると蔓延するので、葉裏や茎・側枝などをよく観察し、発生を確認したら早期に防除を行う。

### 【黒星病、斑点細菌病】

(1) 低温多雨で発生しやすく、発病後の防除は難しいので、予防散布に努める。

### 【ハダニ類】

(1) 発生が見られる圃場では速やかに防除を行う。

(2) 特にナミハダニは9月中旬以降、越冬成虫（オレンジ色を呈する）が出現し薬剤が効きにくくなるので、防除は9月上旬までに実施する。

(3) 薬剤散布の際は、葉裏までしっかりかかるよう十分量を散布する。

### 【ワタヘリクロノメイガ（ウリノメイガ）】

(1) 8月下旬以降は高温時に発生が多くみられる場合があるため、幼虫による葉の綴りや食害痕が確認されたら防除を実施する。

### 【その他】

(1) アブラムシ類の防除は一般に不要であるが、発生が多くみられる場合は9月上旬までにウララDF等の効果の高い薬剤で防除する。

## 3 防除上の留意事項

(1) 薬剤は、耐性菌や抵抗性害虫の出現を回避するために、連用せずに異系統の薬剤をローテーション散布する。

(2) 薬剤の選択にあたっては、有効成分毎の総使用回数に十分注意する。